

私はウンカの大群が降るのを見た

杉本達美

北陸病害虫研究会が発足してから早くも50周年を迎えられ、ますますの御発展を心からお慶び申し上げます。

白表紙の創刊号に始まり50年、研究会のご発展を慶ぶとともに編集をはじめ、関係者の御努力に対し、心から敬意を表する次第であります。

私が福井農試へ勤めたのが昭和28年の春でした。当時の日本は食糧が乏しく、生産費を無視した食糧増産に明け暮れの時代でした。BHCやDDTをはじめ、有機燐製剤などが開発され、水稻の大害虫であるニカメイチュウ、イネクロカメムシ、イネカラバエ等々、今ではあまり見ることも出来ないような害虫を相手に、次々と出現する新農薬の薬効比較試験に追われる毎日でした。

その後昭和40年後半になると、反対に米あまりから、米の生産調整へと、今まで全く考えられなかったような時代に入り、食糧は量より質が（味）が重視されるようになりました。たまたまこの頃福井県下で「斑点米」の発生が問題となり、県農試では早速プロジェクトチームを組み、原因の究明にあたった結果、カメムシ類の吸汁加害によることが判明しました。反面米の流通段階では「福井県の米には斑点米が混入しているから買わない!!」とあたかも毒物でも入っているかのような印象をもたれ、斑点米発生地帯の産米は完全にストップした事もありました。

私共が北陸病害虫研究発表会などで、斑点米に関する研究発表をする度毎に、福井県の産米のイメージダウンにつながると行政機関からずいぶん批判された事を今も憶えています。

しかし何といっても今も鮮明に覚えている体験がございます。それは余りにも突然であり、信じられないようなウンカの異常飛来現象に遭遇した時の光景です。私はこの事を直ちに北陸農試害虫室長の故田村市太郎博士に報告したところ、先生をはじめ編集各位の御好意により北病研報No18の58頁に「ウンカが降る!!」という表題で、その時の様子をのせて下さいました。その一部を紹介しますと、『昭和45年7月15日の体験は長年の研究生活で始めて遭遇した驚異的なものであった。異常飛来という現象のすさまじさにキモをつぶした。福井県丹生郡織田町山中は従来ウンカ類の発生予察定点としてきたが、この日の状況は格別で、検診車の前面ガラスはウンカのため視界を失い、ワイパー使用でようやく運転できるほどであった。まだ定着前のため蜜蜂の巣箱をひっくり返したような有様。空中でも地上でもほとんど同数のウンカが掬取ることができ、舞い降りるといっても降ってくるという感じである……以下省略』

早速同行した山崎昌三郎君と二人で捕虫網25往復50回振りの調査を行いました。500～1000頭が掬取られ、水田のまわりをはじめ、山林、雑草地、農家の庭先など、至る所で掬取ることができました。

私達は以前から、この地方の古老に「ウンカがわく」という言葉をよく聞かされ、一夜にして成虫のウンカが大発生するという信じ難いような話を聞かされてきました。しかし現実にこの光景に接し「ウンカがわく」という意味がよく理解、納得できました。

さらにこの日のウンカは、いつもの見馴れたものとは異なり、非常に活発に動きまわり、ちょっとそばへ近づいただけでも、すぐに飛び立つという興奮状態のものでした。大部分はセジロウンカであり、翅は無傷のように見えました。私は数多くおられる虫屋仲間でも、めったに見る事のできない異常飛来現象に遭遇出来た幸運と突然降って来た無数のウンカを前にして、「お前達はどこから来たんだ!!」と大声で尋ねたい気持ち、さらにはウンカ語の分からないもどかしさをいやというほど痛感したのを今でもはっきり憶えており、終生忘れる事が出来ません。